【解答】

設問A

(1) アースウェーデン　イースペイン
　　ウードイツ　　エーブルガリア

(2) 高齢化の進展で社会保障費が増大する。少子化の影響で労働力不足、さらに消費の縮小から景気低迷、失業率の上昇を招いている。(59 字)

(3) 91 年のソ連崩壊を契機に経済危機に陥り、出生率が下がったことと、西ヨーロッパ地域に若年労働者が流出していること。(55 字)

(4) 女性の社会進出が進んで管理・事務職に従事する女性が増えたが、育児休暇や託児所設置など女性の労働環境が改善されたため。(58 字)

設問B

(1) Ａ－東京　　Ｂ－大阪
　　Ｃ－北海道　Ｄ－千葉

(2) 輸送用機械は多産業の集積地に立地し続けるが、電気機械は安価な労働力や良好な交通手段が存在する地域に立地が移るため。(57 字)

(3) 東北地方は労働集約型のデジタル家電製造を主とする工場の海外移転やアジア諸国の台頭により出荷額が下がり、北九州地方はアジア市場向けの自動車生産及び輸出が堅調で出荷額を維持できたため。(90 字)

【解説】

設問A

(1) 図３－１、２および表３－１と、ありがたいことに３つも指標が与えられているので、全問正解したいところです。エ国がブルガリアに該当すると判断するのは簡単かなと思います。**ブルガリアは、1991 年ソ連崩壊を契機に経済危機に陥り、将来の不安からの出生率低下、さらには医療水準低下による死亡率上昇の状況ともなったため、人口増加率がマイナスとなりました**。図３－１で、1990 年と比較して人口が減少しているのはエ国しかないので、エ国がブルガリアとなります。

次に、図３－１でウ国が 2005 年から下がってきていることに注目しましょう。スウェーデン、スペイン、ドイツの３国の中では、**少子高齢化が最も顕著なのがドイツ**であるため、ウ国がドイツに該当します。残るスウェーデンとスペインの判断は、表３－１でやりましょう。スペインは**自動車工業**などの生産工程･労務的職業が盛んなので、男性 23.6%、女性 21.7%と従事者が多くなっているイ国に該当します。残ったスウェーデンがア国に該当します。サービス経済化が進んでいるので、生産工程・労務的職業に従事する人の割合は総じて低くなっています。

(2) ウ国は先進国で少子高齢化が進んでいるドイツであるため、深刻化している経済的な問題を考える場合、日本を念頭に置いて考えても大丈夫でしょう。

日本で指摘されている高齢化にまつわる問題は、**医療費が増大していって、国家財政を圧迫するということ**ですよね。さらに、財政を健全化させるために､若年層の税金負担が重くなっていきます。高齢者の医療費用や年金などを捻出するために、若年層の納税額は年々上がっていくことになるでしょう。

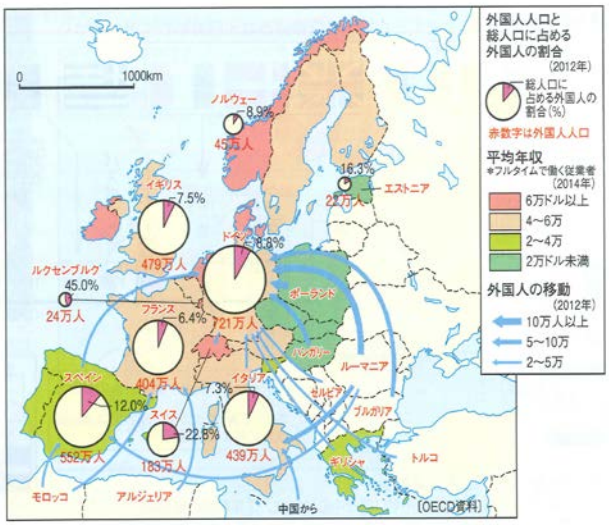
また、少子化にまつわる問題は、**若年層の減少によって、消費の減少につながり、市場が縮小すること**です。景気が悪くなると、様々な産業が停滞し、失業率も高まっていきます。経済の問題とは少し違っているかもしれませんが、若年労働力不足を補うために海外からの移民を多く受け入れることになり、言語的・文化的摩擦が生まれていくかもしれません。

これらをまとめると、社会保障費の増大と市場の縮小を軸に述べていけば良い解答が出来上がると思います。

(3) (1)の解説の中でソ連崩壊のことについては触れたので、それ以外の要因に関して述べていくことにします。

EU 加盟以降の労働力移動は頭に浮かんで欲し

い知識です。さきほど日本の現状からドイツで問題になっていることを述べましたが、**西ヨーロッパは少子高齢化で労働力不足の状態**となっています。足りない労働力を 2004 年以降加盟を果たした東ヨーロッパ諸国から受け入れている国も多く見られます。東ヨーロッパ諸国は労働力流出国となるので、人口増加率を下げる原因になります。なので、ブルガリアの人口減少は、**自然増加率と社会増加率が共にマイナスになること**を述べれば大丈夫です。



《ヨーロッパにおける外国人移動の図》

(4)　問題文の１行目をかみ砕くと、ア国、つまりスウェーデンでは少し前までは少子化が著しく進行していたが、近年は出生率が上がり、少子化が抑えられている、ということになります。当然、子供が多く生まれる状況が現出しているはずなのですが、指定ワードに「女性の社会進出」があります。普通の書き方をすれば、「**女性の社会進出が進んで晩婚化につながり出生率が低下する**」となるはずです。でも、今回は逆の現象が起きています。そう、ここでは工夫が必要です。「女性の社会進出が進んでも、女性が育児しやすい労働環境が整えられてきたため、出生率が上がった」という方向で書きましょう。その際、せっかく表３－１があるわけですから、この表を生かして書くことも念頭に置いておきましょう。

設問Ｂ

オーソドックスで、それでいて実力差を測れる良問だと思います。

(1)　電気機械を主流の産業としてきた都道府県に関しては、東大の過去問を応用することができます。1998 年の過去問に下図を扱った問題があります。今回は表だけ取り出しますが、気になったら解いてみることをお勧めします。下図は、関東・東北地方の各都県における工業出荷額第１位の業種の移り変わりを示したものです。電気機械組立業は基本的には労働集約型の産業に属しますが、1960 年代あたりでは、技術力の高かった東京で盛んに行われていました。ただ、年々東京の地価や労働賃金が高騰していくと、小さな面積でも操業可能な出版印刷業が主流となり、安価な労働力や安価な土地、高速道路などの良好な交通条件を持った北関東、さらには東北に主流を移していくことになりました。

出荷額１位の産業の移り変わり

都県＼年	1950	55	60	65	70	75	80	85	90	93
青森	食料									
岩手	鉄鋼				食料			電気		
宮城	食料							電気		
秋田	木材							電気		
山形	繊維	食料						電気		
福島	繊維	食料	化学					電気		
茨城	鉄鋼	電気								
栃木	繊維	食料	非鉄	電気		輸送		電気		
群馬	繊維			食料	電気	輸送		電気		
埼玉	繊維	食料	輸送		電気	輸送		電気		
千葉	食料			鉄鋼		石油			化学	
東京	化学	食料	電気			出版				
神奈川	鉄鋼	食料	電気	輸送				電気		

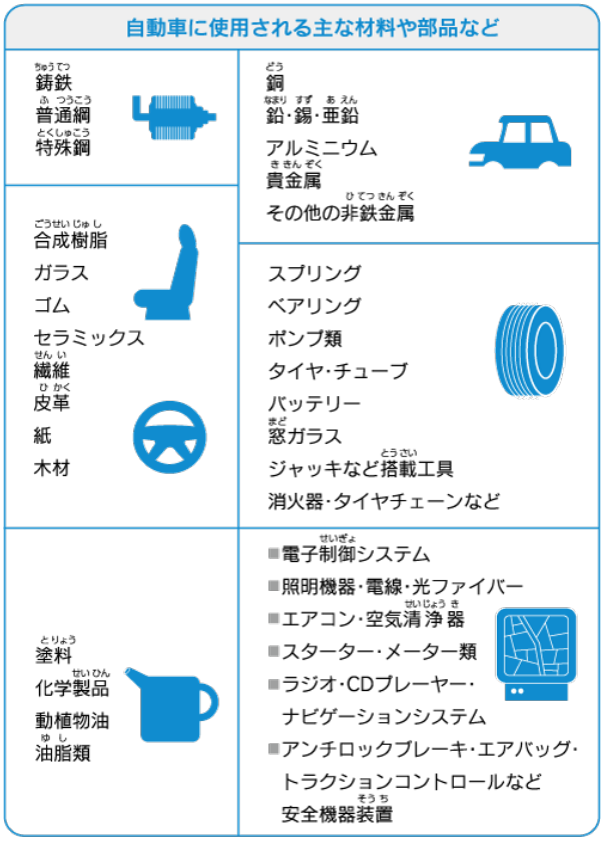
注)非鉄は非鉄金属，電気は電気機械器具，輸送は輸送用機械器具製造業の略である。
出所)『工業統計表』各年版による。

この図を生かすと、1963 年に電気機械の出荷額が第１位となっているＡは東京になります。このＡが決まれば残りは簡単かと思います。Ｃは 1988 年、2013 年ともに食料品で第１位なので、多様で豊富な農業原料を得られる北海道に該当します。Ｄは 2013 年に化学および石油製品・石炭製品の出荷額が第１位なので、石油化学工業が盛んな京

葉工業地域を持つ千葉に該当します。残ったBが大阪に該当します。

(2)　この問題を２行で書き上げるのは至難の業ですね。答案が良くなるか悪くなるかは、特に輸送用機械に関する内容をどれだけコンパクトにまとめられるかにかかっていると思います。

輸送用機械、主に自動車産業はおよそ２万個から３万個にまでも及ぶ部品を組み合わせて完成すると言われています。そのため、**特定大企業の量産工場の周囲にその下請・関連企業が集まる企業城下町型集積**を必要とします。こうした集積を遂げれば、部品や原材料を生産する工場が近接しているので､それらの輸送費の節約になるとともに、組み立て工場にとっては必要なときに必要な部品を迅速に調達することができ、余分な在庫を抱えずにすむメリットを享受することができます。



上記のように、一旦自動車産業が成立してしまえば、自動車産業のみならず、関連産業の出荷額や人件費なども莫大なものとなるため、容易に他地域に移転することが難しくなります。それゆえ、1963 年～1988 年の間に立地がほとんど変化していないと考えられます。

他方、電気機械では上位５都道府県の全国比が72%から 40%に下がっています。ここでは他の都道府県などで盛んになって、相対的に 1963 年の上位都道府県の占める割合が下がったことを書きましょう。(1)の解説にも書きましたが、東京・神奈川・大阪・兵庫・茨城に 72%集中していた状態が、安価な労働力が豊富で、部品輸送に便利な高速道路沿いなどの地方にどんどん工場が建設されていき、40%となりました。

(3)　まず 2008 年を境に出荷額の増減率が分けられているので、**リーマンショック**が何かからんでいるのではないかと推測できます。また､「大幅な減少がみられた県」は秋田・山形・長野であり､「わずかな減少にとどまった県」は福岡と大分であると判断できます。次に、出荷額等の上位業種を調べると、2013 年データでは、秋田・山形・長野の１位はすべて電子部品等となっています。福岡は輸送用機械で、大分は化学でした。これらをまとめると答案が出来上がります。

リーマンショック以降、超円高となった日本ではデジタル家電の輸出が思うように進まず、安価な労働力を求めて海外移転に拍車が掛かりました。なので秋田・山形・長野は産業の空洞化の影響を受けて出荷額を減少させることになりました。一方、大分の場合は化学が１位であり、大規模な装置が必要な化学工業では簡単には移転は進みません。ですから、ある程度化学工業を維持できたことが原因です。また、福岡と大分は共に自動車産業が発達してきていて、経済成長を続けるアジア市場向けの輸出を行っていたため、出荷額の減少を軽微に留めることができました。また、自動車は国内需要が大きいので、国内生産数はある程度維持できたことも原因の１つです。

強者の戦略

今年度の原稿はこれで終了です。また、来年にお会いしましょう。それまでにしっかり頑張って実力を上げておいてくださいね！

【前置き文】

唐突ですが、先日、人生初の胃カメラ(鼻から)を経験しました。昨年もそうだったのですが、この時期は胃の調子が悪くなります。ずっと、胃もたれしてしんどかったので、昨年にかかった同じ病院に行きました。「毎年繰り返しているようだと怪しいねぇ。今年は胃カメラを飲みましょう」と、気になることを言われたので、胃カメラを飲むことを決心しました。前の日は２１：００以降は絶食です。私は１８：３０に素うどんを食べました。ネギも一口も口に入れず、胃の中をすっからかんにすることを意識しました。当日の朝も微量の水しか飲まず、いざ病院へ直行。「胃の中の泡を消す飲料を最初に飲んでください」と言われて、何となくリンゴ味のする飲み物を飲みました。そしてついに病室へ。まず、どちらの鼻が通りやすいかを訊かれたので、左と答え、カメラと同じ大きさのレプリカを試しに左の鼻に入れられました。この瞬間に「でかっ！」とは思いましたが、ここは大の大人がたじろぐことはできないので、さも平然そうに装いました。そして、５分ほどレプリカで鼻の奥の方を広げた後、実際のカメラが挿入されます。のどまで挿入されるまでは、「何だ、余裕ではないか。こんなことにみんな苦しいとか言っていたのか」と余裕の気持ちにまみれていましたが、のどを通るときに急激にむせて、「何じゃこりゃ、すぐに吐き出さねば！」と思うほどに狼狽しました。医師や看護師の方には「もうちょっとしたら慣れますよ～」と言われ、何とか吐き気を抑えながら耐えていきました。確かに、一旦のど元を通り過ぎると吐き気はだんだん収まっていき、その後は 10 分くらい涙目になりながら口呼吸を続け、事なきを得ることができました。のど元過ぎれば暑さ忘れる、とはよく言ったものです。

診断の結果は、「少し胃に炎症が見られるくらいで、がんや潰瘍の恐れはありません」とのことでした。たぶんストレスで胃酸が過多となり、炎症を起こしていたのだと思います。胃酸を抑える薬を処方してもらいました。

みなさんもこれからストレスフルな生活になってくると思いますが、気になったら病院にすぐに行くことをお勧めします。「何もないですよ」と診断されればきっと気持ちが晴れるはずなので、悩んで病状を悪化させないでください。

私のささいな胃カメラ体験はさておき、2017 年度東京大学の第３問の解説を読んでもらおうと思います。ではどうぞ！